

03・3212・0279

特集ワイド

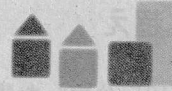
とうとう新型コロナウイルスの感染拡大を受けた緊急事態宣言が出され、ちまたには「コロナ疲れ」という言葉が飛び交う。「みんなストレスたまってる」「学校始まったと思ったらまた休校。なんか疲れちゃう」「感染爆発より国民感情が爆発しそう」。メディアもコロナ一色。社会が閉塞感に包まれ、息苦しささえ覚える。

「私たちは、この事態にどう向き合えばいいのでしょうか」。2008年から全国でがん患者の心の悩みに寄り添う「がん哲学外来」

スが生じることを、私たち一人一人がコントロールするのは難しい。なぜこのウイルスが流行したのか、今考えても仕方がない。だから、「現状にどのように反応するか」という弾力性が問われるというのだ。

樋野さんは、国立ハンセン病療養所「長島愛生園」(岡山県)で勤務した精神科医、神谷美恵子さんの著書「生きがいについて」を取り上げた。「ハンセン病になりながらも生きがいを感じている人に触れ、生きがいを持てる人と持

見上げてごらん



永山悦子



を開く病理学者、樋野興夫・順天堂大名教授に聞いた。

「悩みを問わなければ解消できない」。樋野さんはこう話し始めた。「がん患者の多くは、一日中がんなることばかり考える。がんを『解

コロナ疲れへの処方箋

決』するのは難しいが、考え方の優先順位を変え、がん以外のことに関心を払うようになると、悩みは小さくなり『解消』もできる。ほかの悩みも同じこと」

そして、「心がけによって逆境も順境になる。新渡戸稲造がバス事故に遭って入院したとき、著書を執筆し、『病床にも知恵あり』と話したという。台風が来れば海は荒れ、去れば凪ぐ。つまり、無

頓着になること。『ほっとけ、気にするな』だね」と続けた。

政府が求める手洗いの徹底や「3密」を避けることを否定しているわけではない。新しいウイル

てない人の違いを考えた作品。新型コロナウイルスが流行しても、それだけが人生ではない。明日を思いわずらうより、『人生いばらの道、にもかかわらず宴会』とくらえ、ものごとが起きてからどう反応するかを考えればいい」

世界中の活動が制限され、人間がウイルスに試されているよう。人と人の関係にも影を落とす。「忘れちゃいけないのは、『常識的に』ということだね。そう話して「言葉の処方箋」を結んだ。

(オピニオングループ)